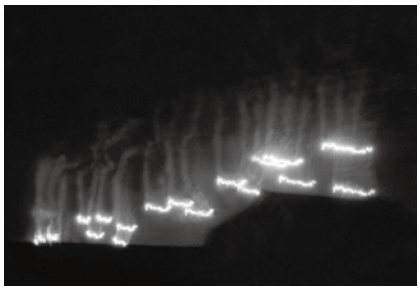
のか

艦砲射撃で打ち込まれた不発砲弾で遊ぶ子ども（浜松市内）

いまでも発見される不発弾

日本全国にはおびただしい数の焼夷弾、爆弾、砲弾が落下しましたが、それらのすべてがさく裂したわけではありません。不発弾も多数あり、現在でも工事現場等から発見されたりしています。戦争の後始末はまだ終わっていません。

艦砲射撃を行うアメリカ軍艦



地上に降りそそぐ焼夷弾の光跡。「幻想的に見えた」という空襲体験者の証言も多く聞かれますが、それはとても恐ろしい出来事の始まりの合図でもありました。

軍需工場や基地など、特定の施設を狙うときは焼夷弾ではなく爆弾が使用されました。写真は1トン爆弾の実物大模型で長さは1.8メートルあります。（大阪国際平和センター）

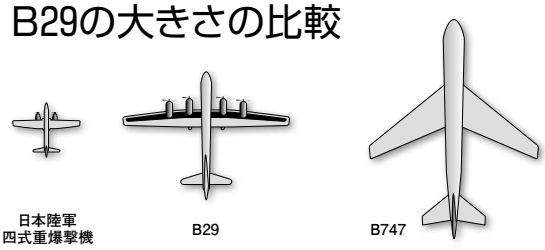
空襲を行ったB29とは?

日本各地を空襲し、広島や長崎に原爆を投下したB29は、アメリカが国力をあげてつくった当時としては超大型の戦略爆撃機です。開発には当時の日本の国家予算の半分以上の金額がつぎ込まれたといわれます。設計・製造はジャンボジェット機で有名なボーイング社で行われ、終戦までに4,000機近くが生産されました。

B29には約9トンの爆弾、焼夷弾などを搭載して高度1万メートル以上を飛行することが可能で、当時の日本の戦闘機や高射砲では太刀打ちができませんでした。昭和20年5月24日の東京空襲の際には一度に500機以上が来襲し、空から焼夷弾の雨を降らせ続けました。

昭和19年6月のB29による日本初空襲から終戦までの間に延べ33,041機が日本各地を襲い、16万トン以上の爆弾、焼夷弾を投下しました。

B29の大きさの比較



現在のジャンボジェット機・ボーイング747と比べるとB29は小さく見えますが、当時は世界最大の飛行機でした。同時期の日本の大型重爆撃機（左）と比べると、B29がいかに巨大な飛行機であったかがよくわかります。

機銃掃射を行った戦闘機とは?

航空母艦から飛び立った戦闘機・グラマンF6Fヘルキャットのほか、硫黄島が占領されてからは、そこを基地としてB29の護衛としてやってきたP51ムスタング（写真）が機銃掃射で猛威をふるいました。機銃掃射を受けた方の体験談では、「パイロットの顔が見えた」というほど低空で迫り、逃げ惑う人々を襲いました。

空襲の恐怖と空腹、不自由を強いられた市民生活

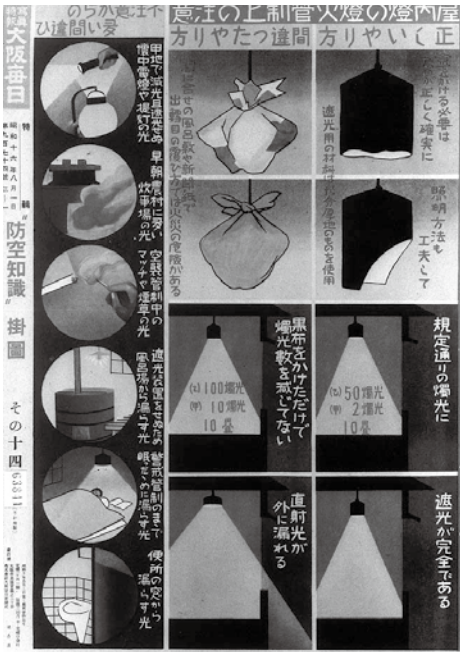
戦争は空襲などで私たちの一般市民の生命を脅かすだけではありません。日常生活にさまざまな困難と不自由、理不尽をもたらし、私たちの穏やかな暮らしを破壊しました。食べる物、着る物すべてに困り果て、不安と空腹で一杯の時代でした。それは戦後もしばらく続きました。

学校では空襲警報に備えた避難訓練が頻繁に行われました。頭に被っているのは「防空頭巾」といわれる、火災や爆弾から身体を保護するものです。

当時、家の床下に防空壕をつくることが推奨されましたが、それは非科学的な考え方でした。空襲時、そこへ逃げ込んだ人たちは家の火災とともに蒸し焼きにされ、命を落としました。

空襲への備え

戦時中、内務省が発行した『時局防空必携』には、「一.私達は「御国を守る戦士」です。命を投げ出して持ち場を守ります」「一.私達は互いに助け合い、力を協せて防空に当ります」といった文言がみられます。市民に対する防空演習は頻繁に行われ、そして有事には逃げることが許されませんでした。

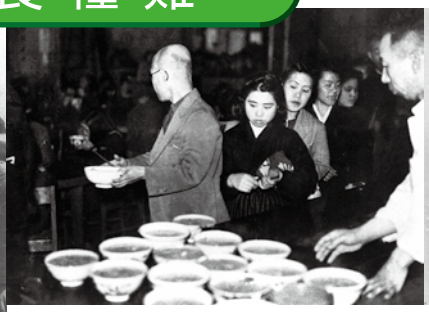


夜間、建物の明かりが外に漏れると空襲の際、目標となってしまうため、照明の使用が制限された。窓は暗幕のようなカーテンで閉めきり、照明器具は布で覆われました。

昔の日本の家は木造家屋が主体でした。空襲で火災が発生すると住宅密集地はひとたまりもありません。そこで火災の延焼を防ぐため、あらかじめ一定区域の建物を強制的に取り壊して空き地を作りました。これは「建物疎開」と呼ばれ、壊された家は全国で60万戸以上に及んだといわれています。

食 糧 難

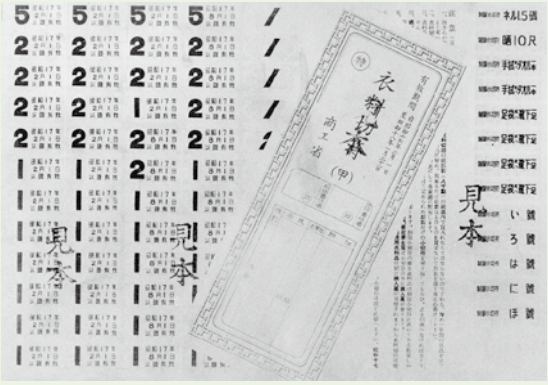
食糧不足を補うため、学校の校庭や屋上など、あいている土地や場所はすべて畑に変わり、野菜が作られました。写真は学校の屋上です。



戦争が進むと次第にお米が手に入らなくなり、さまざまな代用食が考えられました。小麦粉を水でこねて団子にして煮た「すいとん」はその代表的な食べ物です。しかし、小麦粉も手に入らなくなると、ワカメやコンブの粉などで作られるようになりました。

空襲で焼け出された人々のために炊き出しが行われ、おにぎりなどが振る舞われたりしましたが、それはまだ余裕のある頃の話でした。空襲が激化すると食べ物はおろか、飲み水にさえ不自由するようになりました。

配給制度



国民に配られた衣料切符。好きな服が買えるわけではありませんでした。

資源の乏しい日本では、戦争遂行のために物資を回すことを優先し、一般市民に対する生活必需品は配給制に切換え、その供給を制限しました。写真は昭和17(1942)年に始まった衣料切符で、衣類はこの切符の範囲内でしか手に入りませんでした。他にも米、砂糖、酒類、たばこ、マッチなども配給制となり数量が限定され、自由に手に入りませんでした。

金属回収令

供出のため集められた寺の梵鐘。

資源が乏しい日本では金属資源の不足を補うため、一般家庭などから金属類の供出が義務付けられました。マンホールの蓋、二宮金次郎などの銅像、お寺の梵鐘、線路(これにより単線になったり廃止になった鉄道もあった)をはじめ、家庭では鍋や釜、服の金属ボタン、指輪、置物など、金属であれば、ありとあらゆるものが徹底的に回収され、武器などに生まれ変わりました。

学童疎開

列車で地方へ避難する子供たち。

都市部への本格的な空襲が予想されるようになると、子どもたちを安全な地域へ避難させる「学童疎開」が始まりました。事情を理解できない子どもたちは最初は遠足気分でしたが、やがて親元を離れる現実に直面し、気分が沈んでいきました。疎開先では食べ物に不自由し、ノミやシラミに悩まされました。また、学童疎開を受け入れる側も大変な思いをしました。

女子挺身隊

飛行機の製造に携わる女子挺身隊。

徴兵で男性が次々と戦場へ赴いたため、それによる労働力不足を補うために、昭和18(1943)年から14歳(後に12歳から)から25歳までの未婚、無職、不在学の女性は「女子挺身隊」として軍需工場で働くことが法律で義務付けられました。工場で飛行機や武器の生産に当たったほか、電車の運転士や車掌、線路工事などにも従事しました。

戦災孤児

空襲により両親や家族を失ったり、一家離散で行方不明になるなどして取り残された子どもたちは「戦災孤児」と呼ばれました。運良く親戚や孤児院などに引き取られればまだ幸せでしたが、家も身寄りの当てもない子どもは「浮浪児」となり、靴磨きをしたり物乞いをしながら生きていくしかありませんでした。

靴磨きに疲れて、駅構内で寝入った子ども。

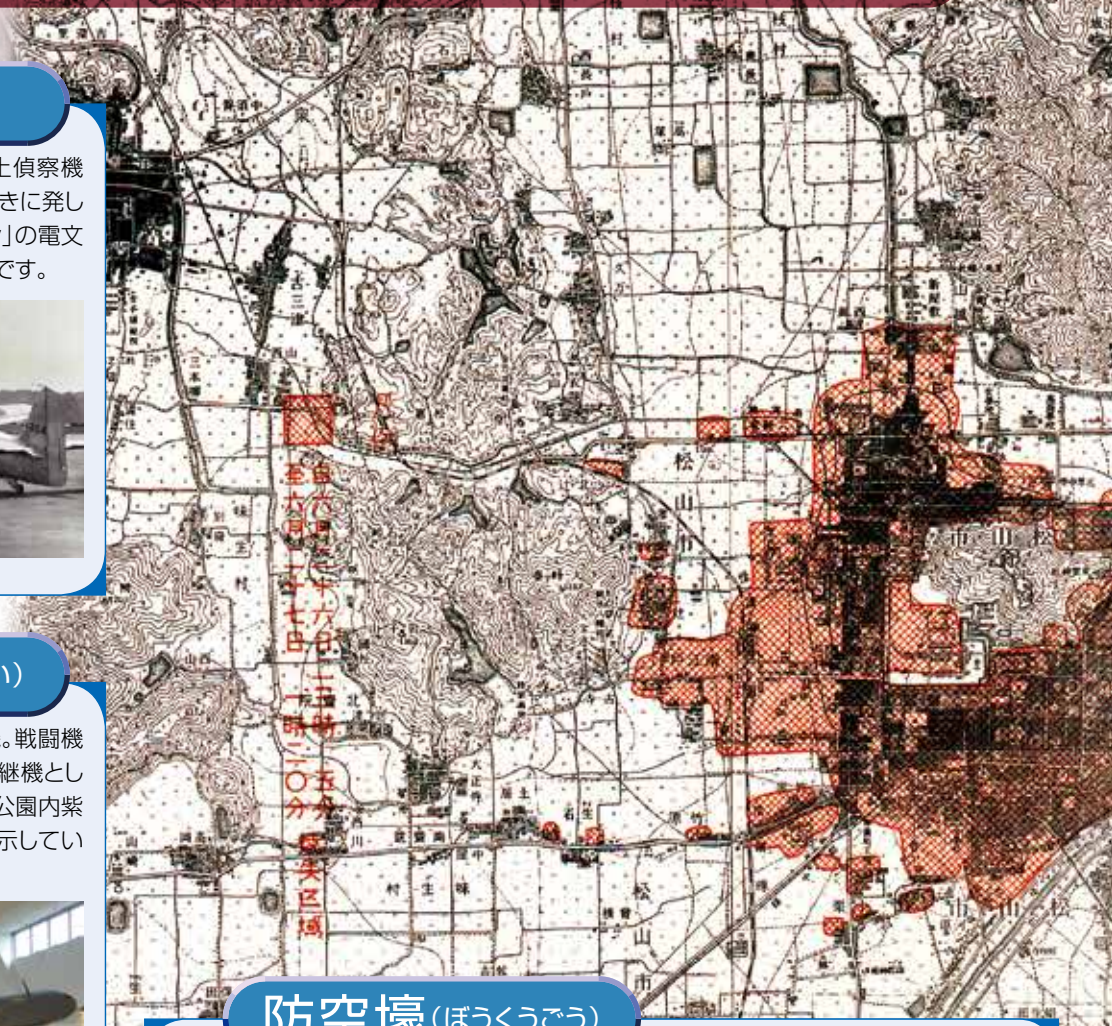
松山のまちも燃えた

空襲があったのは大都市だけではありません。私たちの住む松山も空襲を受け、まちが燃えました。多くの一般市民が被害を受けたのです。

昭和20年7月26日午後11時30分ごろ、松山はB29による焼夷弾爆撃を受けました。城山を中心に、その周辺から市の中心部に焼夷弾が投下されたため、市街の周辺部から火の手があがり、市民の必死の消火作業もそのかいなく、わずか3･4時間で市街地は火の海となりました。この空襲によって市の中心部は焼け野原となり、甚大な被害を受けました。(※1)また、この他にも複数回の空襲があり、多数の方が犠牲となっています。(※2)

(※1)被災面積4,785平方キロメートル、罹災戸数14,300戸、死者251名(男117名、女134名)、行方不明者8名　『松山市誌』より

(※2)昭和20年3月から8月までの松山市の空襲による犠牲者数543名　『松山市の空襲による犠牲者を偲ぶ(NPO松山市戦災遺族会)』より



彩雲(さいうん)

太平洋戦争中期から運用された艦上偵察機で、追撃してきた敵機を振り切ったときに発した「我ニ追イツクグラマン(敵機)無シ」の電文は、本機の高速性能を示すエピソードです。

(写真提供:株式会社文林堂『世界の傑作機』)

紫電改(しでんかい)

太平洋戦争末期に配備された戦闘機。戦闘機「紫電」を改良した機体で、零戦の後継機として運用されました。(愛南町馬瀬山頂公園内紫電改展示館にて日本で唯一、復元展示しています。)

(写真提供:南レク紫電改展示館)

防空壕(ぼうくうごう)

敵方の航空機の攻撃から避難するために造られた施設。鉄筋コンクリート造のものもありますが、物資難の状況から多くは土に穴を掘り、周囲に土を盛ったり、廃材を利用して築くなど、簡易な構造のものでした。空襲から逃れるため、学校の校庭、強制疎開跡の空き地、個人宅内などに作られ、空襲警報が鳴ると、身近な場所に造られた防空壕に身を隠しました。

掩体壕(えんたいごう)

航空機を敵の攻撃から守るために建設された施設。現在の松山空港周辺には当初63基あったとされていますが、宅地化が進み、今では3基が残るだけとなりました。大きいものになると、幅22m、奥行12mにもなります。上記の艦上偵察機「彩雲」や戦闘機「紫電改」を格納していました。

―松山大空襲―

※本冊子では、被害の一番大きかった昭和20年7月26日の空襲を松山大空襲と呼称します。

なぜ松山で空襲があったのか

米軍は、日本の戦争遂行能力の削減を目的として、1940年（昭和15年）の国勢調査を基に家屋の密集度や延焼度、軍需産業地域を検討の対象として、全国で180の都市が攻撃の標的とされたと言われています。
現在の松山空港がある場所には、米軍に「松山西飛行場」と呼ばれていた松山海軍航空隊がありました。沖縄上陸作戦において、日本の特攻機に苦戦した米軍は、その発信基地となる飛行場を重点的な標的としたようです。
松山のほか、県内では、工業都市であった新居浜や今治、軍事関連施設があった西条、宇和島などの地域が空襲を受け、甚大な被害がありました。

この地図は、松山大空襲により焼失した範囲を示したものです。
※上記の日付が６月になっていますが、昭和２０年７月の誤りです。
独立行政法人　国立公文書館　所蔵

戦災前の松山市

戦災後の松山市（立花橋から松山城を写した写真）

	全市	罹災	比率
面積	87.81 平方キロ	4.785 平方キロ	5.4%
戸数	26,000 戸	14,300 戸	55%
人口	117,400 人	62,200 人	53%

松山大空襲による被害状況

戦災からの復興

市街地の大部分を戦災により焼失しましたが、戦後直ちに戦災復興都市計画に着手し、秩序ある市街地、交通体系の整備等、総合的な都市機能を備えた都市へと発展しました。

平和へのねがい

松山市内には戦争で失われた多くの命を慰めるための祈念（記念）碑や慰霊碑などが多く残されています。また、二度と戦争の悲劇を繰り返さないという強い想いや平和への願いを込めた行事なども開催されています。

祈念（記念）碑・慰霊碑

松山市戦争犠牲者　平和祈念碑
道後姫塚

松山海軍航空隊跡
北吉田町

歩兵第二十二連隊跡
堀之内

戦災復興記念碑
堀之内

「非核平和宣言都市」
「世界連邦平和宣言都市」
「人権尊重宣言都市」モニュメント
JR松山駅前

原爆死没者慰霊碑
石手川緑地内

愛媛県戦没者慰霊塔
北斎院町 丸山墓地内

軍馬犬鳩家畜慰霊塔
北斎院町 丸山墓地内

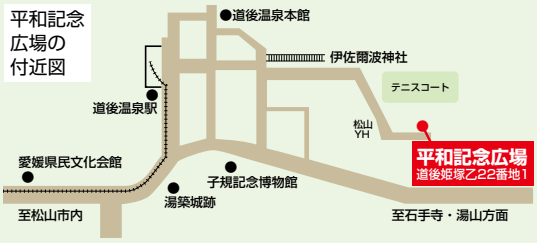
歩兵第二十二連隊忠魂碑
御幸1丁目 愛媛県護国神社境内

シベリア抑留者慰霊之碑
御幸1丁目 愛媛県護国神社境内

雄飛予科練鎮魂之碑
御幸1丁目 愛媛県護国神社境内

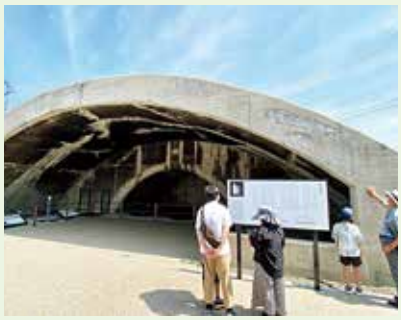
戦争犠牲者平和祈念追悼式

松山大空襲を受けた7月26日には、毎年、道後姫塚の松山市平和記念広場で、平和祈念追悼式が行われています。遺族や平和を願う市民の皆さんが参加し、空襲や戦争の犠牲者へ献花を行い、平和への祈りを捧げています。



平和資料展

松山市では、毎年平和資料展を開催しています。
市民の皆さんからご提供いただいた貴重な遺品や資料のほか、広島･長崎の原爆の写真やパネル等を展示し、戦争や原爆の悲惨さをより多くの方々、特に戦争を知らない若い世代に伝え、平和の尊さや大切さを認識していただくことを目的としています。



平和の語り部

松山市では、年間を通じ、市内の小･中学校を中心に平和の語り部事業を実施しています。
戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えていただける方々を「平和の語り部」として登録し、各学校などへ学習会の講師として派遣する事業です。（国際平和や当時の体験談など貴重なお話をしていただきます。）

松山市の主な旧跡・石碑

（小冊子で紹介した旧跡・石碑の案内図）

❶…平和記念広場（松山市戦争犠牲者平和祈念碑、マハトマガンジー氏碑など）

❷…護国神社（歩兵第二十二連隊忠魂碑、シベリア抑留者慰霊之碑、雄飛予科練鎮魂之碑など）

❸…石手川緑地内（原爆死没者慰霊碑）

❹…堀之内（歩兵第二十二連隊跡、戦災復興記念碑）

❺…JR松山駅前（「非核平和宣言都市」「世界連邦平和宣言都市」「人権尊重宣言都市」モニュメント）

❻…丸山墓地（愛媛県戦没者慰霊塔、軍馬犬鳩家畜慰霊塔）

❼…掩体壕

※上記のほか、松山市内には、多くの旧跡、石碑が現存しています。

【表紙】手島石泉（1852～1947）
越智郡上浦町瀬戸の生まれ。愛媛最後の南画家といわれ、淡黄色の着彩山水を得意とする。晩年は、松山に住み、後進の指導に努めた。表紙に掲載した日本画は、松山大空襲の悲惨な様子が描かれており、防空壕に入ろうとしている老人は、画家石泉本人ではないかと思われる。
〈落款〉昭和二十年七月二六日夜米機空襲松山市焼打石泉山越弘願寺に避難土壕に隠る

【ご教示・編集協力・聞取り調査協力・資料提供をいただいた方々、施設、団体（順不同、敬称略）】
板垣克男、愛原 章、忽那祐三、佐川紳一郎、藤村敏夫、日本戦災遺族会事務局、松山市遺族会、松山市郷友会連合会、愛媛新聞社、愛媛県護国神社、広島平和記念資料館、株式会社文林堂、南レク紫電改展示館、龍仙院、松山市平和の語り部講師一同

【編集・発行】松山市市民部市民生活課　〒790-8571　松山市二番町四丁目7番地2　TEL089（948）6814　FAX089（934）3157【初版発行】平成25年4月【改定第3版】令和6年3月